

学校経営のポイント

高校野球“日大三高の総合力”に学ぶ

若井 彌一

第 93 回全国高校野球選手権大会は、決勝戦（8月 20 日）で日大三高（西東京）が青森代表の光星学院高校に 11：0 のスコアで大差をつけて快勝し、全日程を終えた。

一方的な試合展開となってしまう、投手戦にせよ打撃戦にせよ、接戦の好ゲームを期待したファンにとっては、やや期待はずれであったかと思われるが、ダラダラとした試合展開ではなく、光星学院高校も、最後まで懸命にプレーした。

高水準の投・攻・守の総合力

「総合力」と言ってしまうと、簡単ではあるけれども、その総合力の差をまざまざと見せつけた決勝戦であった。

日大三高は、初戦（8月 10 日）で日本文理高校（新潟代表）に 14：3 で快勝、2 回戦（8月 14 日）では開星高校（島根代表）を 11：8 で下し、また、3 回戦（8月 16 日）では、智弁和歌山（和歌山代表）を 6：4 で切り抜け、さらに 4 回戦（8月 19 日）の関西高校（岡山代表）戦では 14：4 で圧勝して、決勝に駒を進めたのであった。

今回、10 年ぶりの 2 度目の全国優勝（制覇）ということであり、今年春の選抜選手権大会でもベスト 4 の実績を残していたことから、夏の大会でも、いわゆる「下馬評」では優勝候補の有力校に名を連ねていた。

その意味では、順当な結果であるけれども、トーナメント戦を予想どおり勝ち上るのは、やはり並々ならぬ実力であり、今年の日大三高の場合は、投・攻・守ともに高水準に鍛えられていることが特徴である。スコアからもわかるように、智弁和歌山戦は、両チームがともに力を出し切った接戦の好ゲームで

あった。

指導者への信頼感と自覚・工夫の鍛え

今や夏の高校野球は、この国のお盆を挟んでの恒例行事として定着している。各都道府県での地方大会を含めると、約 1 ヶ月半に及ぶ。8月 20 日の決勝戦で今年の夏は終わり、秋を迎える心境の人々も少なくないと思われる。

今年の大会は、東日本大震災の被害があまりにも甚大であったこともあり、宮城、福島両県の高校野球部には、単一高校でチーム編成することが困難となり、チーム編成の特例も認められるなど、大会運営も関係者の苦勞を伴うものであったであろう。

そのような厳しい状況のなかではあったが、岩手県代表・花巻東高校、宮城県代表・古川工業高校、福島県代表・聖光学院ともに、澁刺とした闘いぶりを示してくれた努力と気力をねぎらいたい。

野球に限らず、広く全国・各中学・高校の部活動指導をされている教員等に訴えかけたい。強くなって全国大会の優勝校（チーム）となるまでには、長短さまざまとはいうものの、その道のりは平坦ではない。別次元の強さを誇るチームであっても、やはり、基礎からの練習による鍛え上げが必須である。

鍛え上げるといっても、子どもたちに現実（自分）を見つめさせ、そこからどのような手順で力をつけていくかを理解させ、力がついていくことを認識させ、充実感をもたせ、さらなる課題に立ち向かおうとする自覚と工夫を促したい。

蛇足ながら、教科等の学習指導も、原理的にはこの手順を踏んで、学びの充実感を存分に実感させるように意を用いたい。

（わかい・やいち = 上越教育大学長）

●最新刊好評発売中！ モデル応答例、実績アピールのコツなど合格に必要な要点を提示！

『改訂 学校管理職選考直前チェック 面接合格の勘所』

大宮 光徳(元東京都教育庁首席管理主事)【編】

四六判 128 頁 / 定価 1890 円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料 FAX 0120-462-488 をご利用ください(24 時間受付・即日発送)